

明日の社会に環境科学を正しく活用しよう

先週 25 日の河北春秋は水の世紀に相応しい随筆であった。ところが、当日夕刊ではとんでもない記事を大きく取り上げており、新聞社として環境科学を正しく認識して、21 世紀の社会の有り様を導こうとしているのか甚だ疑わしい。私が以前から、環境科学の視点からは評価し得ない屋上緑化、生芥コンポスト、既存の屋根への太陽電池パネル設置などへの税金補填などはまさに合理性を欠く税金の無駄使いと思っていたが、夕刊の「緑のカーテン」普及の記事もまさにそれに該当していた。

屋上緑化はその維持管理コストだけでなく、最上階だけの省エネだけでそれ以下の階には役立たぬ上、建築コストを上げるだけで、設計者には亜熱帯・熱帯地方に特有の多肉植物を採用している方も居り、どうも多肉植物の気孔は昼間には閉じていることを知らずに蒸散作用を評価していると思えなかった。小説家の石原東京都知事がそれらの光合成メカニズムが温帯植物とは異なることを知らずに宣伝するのは仕方がないとして、著名な建築家、安藤忠雄氏までもとなると日本の環境科学教育の遅れに由来するだけに私達にも責任がありそうだ。生芥コンポストもまた然りで、細菌増殖の活用だけに冬期での加温、悪臭発生防除のための酸素供給、得られた有機肥料の搬出システムを総合すると全エネルギー経費だけでも、コンポスト購入が資源循環型社会実現に貢献しているとは云えない。

最近流行のクリーンエネルギー生産のための太陽電池パネル採用者への減税措置もまた税金の無駄使いでお粗末である。屋根葺き材の速い劣化速度と太陽電池パネルの劣化速度の大きな違い、異常気象に対応する防災措置や、光・電力変換効率維持のための清掃費用だけを取り上げても、責任ある行政なら一定の基準を設けて普及させぬ限り、維持管理コストだけで消費者への詐欺行為と言わざるを得ない。クリーンエネルギー生産システムの構築は明日の日本の宿題である事は間違いのないだけに、全てについて正しい理解と判断の基で計画実施されねば意味がない。いずれ、各家庭に太陽電池パネルを設置させねばならぬ時代が確実にやって来るとすれば、太陽電池パネル自体を屋根葺き材とし、その表面を必要に応じて洗浄できる屋根構造の設計を普及させてこそ、税金補助の意味がある。街づくりにしても然りである。昼間でも光の射さぬケヤキ並木が明日の仙台市民のために相応しいのか市民自体に判断させる市民教育こそを、行政に求めざるを得ない時代が目前に迫っているのだ。

夕刊の「ヘチマ、ゴーヤ、アサガオで夏涼しく」が正しい環境行政かも同じ視点で捉えるならば、まさに間違っていると云わざるを得ない。戦前ならアサガオ・ヘチマ、戦時中はカボチャが多くの家庭で観賞と、食糧自給のために栽培されたが、それらは垣根・物置・鳥小屋など住まいの風通しを妨げない場所に限られていた。戦前の和風建築の廊下には日差しを遮る簾が普及しても、曇天の日には部屋に陰鬱な暗さをもたらす蔓植物を活用するなど有り得ない。各職場で窓を開けても涼しい風が吹き込まず、曇天の日には室内照明を点灯せねばならぬ経費・行為がどれだけ環境問題の解決になるのか？日本の伝統は簾と云う優れた日除けを産んだが、西洋では日除けブラインド

を普及させている。つまり、西日に曝されるとなればブラインドを開いて日射しを妨げながら、微風だけは取り入れるか、クーラー稼働率を減らし、曇天・雨天の日や西日が射さぬ時間帯には窓上に巻き上げて光と風を招き入れる。もし、学校を初め夏季休暇・お盆休みのある職場で大規模な緑のカーテンを美観を保ちながら維持するとなれば、施肥は無論、その給水管理の莫大なコストをどの様に推計しての事か？私は、今、個人的に幾つかの企業に、巻取り式（幕型）太陽電池パネルの開発を急がせているが、それこそ有限のエネルギー資源への依存を減らし、一刻も早く地球温暖化の防止のための日本の国際公約 25%温室化ガス削減を実現させる道の一つと思うからである。

2010年6月27日

江刺 洋司

(東北大名誉教授・元国連コンサルタント)

〒980-0805 仙台市青葉区大手町 10-24

Tel:022-227-6036、 Fax:022-227-0509

